

<コラム>

エイムズ唯子の「心理学の周辺」

第9回：「人生はビタースイート」の巻



ブリストルという英国の港町にほんのいっとき住んだことがあります。落ち葉の散り敷くころに移り住み、次の秋風が立つころにはカナダに越してしまっただけですが、イギリスで過ごしたひと夏の風景は、いまでも鮮やかに心に残っています。汗ばむ季節に思い出すのは、ピムス(Pimm's)という冷たいカクテル。ラズベリー色をしたジンベースのリキュールをレモネードで割って頂くのですが、グラスにはきゅうりの薄切りとミントの葉っぱが入っています。きゅうりをキューカンバーではなく、キュークスと親しみを込めて呼ぶことを知ったのも、このころでした。パブのカウンターでピムスとクリスプス(=ポテトチップス)の小さいパッケージを調達し、いそいそとパブの中庭に座れば、気分はオールドブリティッシュサマー。きゅうりやミントの青くささが、ピムスの甘さに涼を添えます。

夏のイギリスのパブの風景が、ビタースイートメモリーなのは、ピムスのせいばかりではありません。そのとき隣に座っていたのは前の夫でした。彼は大学の同級生で、イギリスの大学院で研究者を目指して博士論文を書いていました。30代を目前に、彼と私は、まさに張り合うようにして、研究で身をたてるために手探りを続けていました。外国語で論文を書くというムチャを承知で日本を離れたものの、将来への不安は消えず、気の張る海外生活でした。お互いの存在は、やすらぎであり、自分の弱気に喝を入れるためにも必要だったのです。そのころ、30年、40年という歳月をかけて、夫婦が夢を重ね合わせていくなんてことは、当たり前にはできると思っていました。若いエネルギーに身をまかせて、なんだってできる、と思い込まなければ、一歩だって前へは

進めなかったからかもしれません。「自分たち」の人生を歩いていたはずなのに、いつのまにか、「自分」の人生しか見えなくなっていたことに気がついたのは、それから何回目かの夏でした。

イギリスでは、映画もちよいちよい観に行っていました。ピアニストのデイヴィッド・ヘルフゴットの半生を描いた「シャイン」(1996年公開、オーストラリア)は、ラフマニノフのピアノコンチェルトの情感が素晴らしいのですが、ヘルフゴットが未来の伴侶と出会うシーンで使われていた歌がどう

しても聴きたくて、必死

でCDを探し、安

物のプレイヤーで

繰り返し聴いたこと

は懐かしい思い出です。ヴィヴ

アルディ作曲の Nulla in

mun-do pax sincera

(RV630)という宗教曲

ですが、歌詞を調べてみ

たら、「まことのやすらぎ

はこの世にはない」という意

味でした。「苦淡なき真に純粹なるや

すらぎは、主イエスのうちにこそある」と歌われます。まさに地上はビタースイート。

もう立ち上がれないと思うほどの試練を与えるのが神様なら、スイートな希望を与えてくださるのもやっぱり神様。英語で cool as a cucumber といえば、きゅうりのようにクールな御仁というほどの意味になりますが、そういえば前の夫は、ひよろりとしたキュークス風。彼も私もめでたく再婚した後、かつての義母が笑って言いました。「お互い、2回目は全然タイプの違う人と結婚したわねえ、学習したのね！」

(高崎健康福祉大学准教授、フォーラム共同研究者)



2012年夏、茜屋珈琲店
(軽井沢)にて